ハイデッガーにおけるマルクスとユダヤ的なもの

――「存在史的反ユダヤ主義」を検証する（２）――

田　鍋　良　臣 *

はじめに

2014 年春にハイデッガーの遺稿「黒ノート」が刊行されて以来、ハイデッガーをめぐる状況は一変した。なぜなら、そこに記されていたユダヤ教（ユダヤ人、ユダヤ的なもの）に関する批判的な文言が、いわゆる「反ユダヤ主義」とみなされたためである。その後、「黒ノート」関連の書籍が矢継ぎ早に出版され、また各種メディアで取り上げられるなど、一大スキャンダルに発展した。その中心にいたのが、「黒ノート」を編集したトラヴニーである。彼は「黒ノート」刊行と同時に『ハイデッガーとユダヤ世界陰謀の神話』（以下『神話』）を刊行し、そのなかで、「黒ノート」の「反ユダヤ主義」が、ハイデッガーの存在史的な思索に根ざした特異なものであるとの主張を展開した。「存在史反ユダヤ主義」と特徴づけられたこの新たな「反ユダヤ主義」は、こうして、「20 世紀最大の哲学者」と言われたハイデッガーの地位を、これまでにないほど危うい状況に追い込むことになった。

ただ、最近の出版状況を見るかぎり、「ハイデッガー・アフェア」とも呼ばれたこの騒動はいくぶん落ち着いてきているように思われる。とはいえ、議論の場が地道な研究に移った様子もない。察するに、トラヴニーの主張が広く行き渡り、もはや類書の出版を急ぐほどの需要が見込まれなくなった、というところだろう。だがそれは裏を返せば、「存在史的反ユダヤ主義」という名称が一定の市民権を得たことを意味している。

けれども、一個人を「反ユダヤ主義者」と呼ぶことは、この語のもつ忌まわしさを鑑みるなら、相応の慎重さが求められる、ある意味で危うい言動でもある。だが、ことハイデッガーに関しては事情が異なるようだ。たとえばトラヴニーは、〈ハイデッガーはフッサールをユダヤ人ゆえに批判した〉と非難しているが、この刺激的な見解は、テキスト読解上看過しえない問題を抱えている[1]。この点に気づいた筆者は、現在影響力のあるトラヴニーの主張は、はたしてどの程度正当と言えるのか、一度検証する必要があると考えるようになった。

本稿はこの検証作業の第二弾として、ハイデッガーにおけるマルクスの問題を中心に取り組む。フッサールのケースほど目立ちはしないが、トラヴニーはこの点に関しても、厳密とは言い難い議論を展開している。しかもこの議論は、最終的に、〈ユダヤ教の自滅としてのショア〉という衝撃的な結論にいたるため、検証作業はより慎重なものとならざるをえない。そこで本稿では、トラヴニーの主張をできるかぎり丁寧に分析するため、『神話』以外の彼の著作にも目を配り、それらとハイデッガーのテキストとを照合することで、両者の違いを浮かび上がらせるという手続きをとる。ただし、この試みの主眼は、決してトラヴニー批判にのみ置かれているわけではない。むしろ、トラ

＊　鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構 教養教育センター兼務教員（高等教育開発センター准教授）

ヴニーの議論を検討することは、従来の研究では、資料的な制約のため必ずしも十分に明らかでなかった、ハイデッガーにおけるマルクス（およびマルクス主義）の問題に光をあてることになろう[2]。それがひいては、「黒ノート」のユダヤ批判の真意を解明し、「存在史的反ユダヤ主義」と呼ばれるものの正体を見極めるための糸口になるはずである。[3]

１．30 年代の意識

トラヴニーが、ハイデッガーにおけるマルクスの問題について取り上げたのは、『神話』の第 3 版（2015 年）で新たに追加された章「絶滅と自滅 Vernichtung und Selbstvernichtung」においてである。「絶滅収容所」を連想させるこの章題がすでに示唆するように、トラヴニーはここで、「黒ノート」の記述から、まさしく「彼〔ハイデッガー〕はユダヤ人への暴力を必然的なものとみなしていたのかもしれない」（HW, 13）という疑惑に切り込んでいる。トラヴニーはまず、ハイデッガーがフライブルク大学の総長として教壇に立った 1933/34 年冬学期講義のヘラクレイトス解釈に注目する。ハイデッガーはそこで、ヘラクレイトスの有名な断片 53「戦いは万物の父である〔……〕」を逐語的に解説しているのだが、トラヴニーが問題視するのは、格言冒頭の「戦い（ポレモス）」についての以下の発言である。

> 敵に対して立つこととしての戦い、よりはっきりと言えば、対決において立ち通すこと。／敵とは、民族の現存在やそこに所属する個々人の現存在の本質的な脅威が、そこから登場するかのものであり、そのすべてである。敵は外部の敵である必要はなく、外部の敵がより危険な敵であるわけですらない。まるでいかなる敵もいないかのように見えることもありうる。その場合、敵に対して立つことが生起し、現存在が鈍くならないための根本要件は、敵を見つけ、敵を光のうちに立て、それどころかまずもって敵を創造することである。／敵は民族の現存在の最内奥の根のなかで陣地を構えることができるし、民族に固有の本質の前に立ちはだかり、背くこともできる。〔……〕多くの場合はるかに困難で時間がかかることは、敵をそのものとして探し出し、敵を展開へもたらし、敵に対して自らをごまかさず、攻撃の用意を怠らず、不断の準備にいそしみ、高め、そして完全な絶滅という目標をもった長期的な視野で攻撃をしかけることである。（GA36/37, 90f.）

トラヴニーは、ここで「敵」が「完全な絶滅」に結びつけられていること、およびこの議論はヘラクレイトスの思想ではなく、ハイデッガーの独自な見解であることを強調したうえで、「民族の現存在の最内奥の根のなかで陣地を構えることができる」敵とは「寄生者」のことではないか、と反語的に問う（HW, 103f.）。そしてこの問いに対するハイデッガーの「沈黙」を確認しつつ、いささか唐突に、ここからおよそ 60 頁後に語られたマルクス主義に関する言及を引用し、以下のように結論づける。

> だが彼〔ハイデッガー〕はより後の箇所ではこう述べている。「それゆえマルクス主義に最終的にけりをつけうるのはただ、われわれがイデア論およびその二千年の長い歴史と対決する場合だけである」と。「マルクス主義」こそ「本質の」 - 「敵」とみなされている。マルクスは 30 年代の意識では「ユダヤ人マルクス」だ。（ibid., 104）

トラヴニーは、「30 年代の意識」に還元する仕方で、総長期の講義から〈絶滅すべき敵＝マルクス（マルクス主義）＝ユダヤ人（ユダヤ教）〉という等式を取り出している。これに従えば、すでに総長期のハイデッガーの頭のなかでは、「暗黙のうちに、『マルクス主義』つまり『ユダヤ教』は『完全な絶滅』に曝されている」（ibid.）ことになる。この見解が、以後のトラヴニーの議論を主導することになるのだが、はたして当該箇所から、このような反ユダヤ主義を読み取ることができるのか。ハイデッガーは、ナチスのプロパガンダに「汚染」（ibid., 12）された状態で、ヘラクレイトスの格言を解釈したのだろうか。

たしかに、ここでのハイデッガーの議論は、第一次世界大戦後のドイツで語られた、いわゆる「背後からの一突き」伝説に通じるものであろう[4]。この議論の少し前には、「原始ゲルマン的な種族の本質」や「われわれゲルマン的な人間種族」といった、いわゆる「アーリアン学説」に絡むような語も語られている（vgl. GA36/37, 89）。これらの発言から、ハイデッガーが当時、大学総長として、ナチスのイデオロギーやプロパガンダとかかわりながら講義を行っていたことがうかがえる。問題は、このときのかかわり方がどのようなものであったかである。これを考えるためには、先ほどの引用に続けてなされた、同講義の以下の一節は重要である。

> ポレモス、戦い（敵に対して立ち通すこと）は、パンタ、すべてを包括し、浸透している。パントーン――存在者の全部、全体としてのすべて。ここからわれわれは、格言の射程をあらかじめ見て取る。格言は、人間の態度としての戦いだけにかかわるなどというわけではなく、すべての存在者にかかわる。また戦いは戦いで、たんなる随伴現象（たしかに全般的だが、まさに一緒に生じるだけのもの）などではなく、全体としての存在者を規定するものが、全体としての存在者を卓越した仕方で規定している、ということである。（GA36/37, 91）

このようにハイデッガーは、ヘラクレイトスの「戦い」を人間的な戦いにのみ限定する解釈を退け、存在者の全体にかかわる点を強調している。下線部の「などというわけではない nicht etwa」という否定句は、たとえば、『わが闘争』に引きつけてヘラクレイトスの「戦い」を人種間の「生存闘争」とみなしたり、敗戦の責任を社会主義者やユダヤ人に押しつけるような当時の風潮に対して、釘を刺しているとも取れなくはない。ハイデッガーは、ヘラクレイトスの「戦い」をそのようなものに矮小化して受け取ってはならない、と言いたいのだろう。だとすれば、「全体としての存在者」を「格言の射程」に入れた場合、「敵」はいかなるものとして現れるのか。これについては残念ながら、明言されてはいない。ただし、この後の講義の展開を追えば、ある程度想定することはできる。まず、全体としての存在者を「卓越した仕方で」規定する「戦い」とは、まさしく存在の問いに属する事柄と言える。とりわけ、「戦いは存在者を存在のうちへもたらす、それは同時に、戦いが存在者を隠れなさ、真理のうちではっきりと立てることを意味する」（ibid., 117f.）と言われるように、ハイデッガーは、この戦いについて、講義の表題にある「真理の本質」に関係するものと解釈している[5]。そしてこの「真理をめぐる戦い」は、プラトンの「洞窟の比喩」を考察するなかで、最終的には「非真理との対決」、つまり「影」や「隠れ」との戦いになり、またそこには、「歴史的な民族」の問題も指摘される（ibid., 184f.）。ここから振り返ると、トラヴニーが反ユダヤ主義的な響きを聞き取った「敵」に関する記述のうちに、隠れたものとしての非真理の特徴を読み取ることはさほど

難しいことではない。あるいは、同講義のなかで、「今日の洞窟の住人の模範例」として、「生物学的世界観」に捕らわれたコルベンハイヤーが名指しで批判されていることを考えるなら（vgl. ibid., 209ff.）、ハイデッガーが「敵」として思い描いていたのは、ナチスのイデオローグたちが当時盛んに喧伝していたような、生物学的な人種主義であったと言えるかもしれない。いずれにせよ、明言されていない以上、敵の「正体」についてどのように考えようと、推測の域を出ることはないだろう。ただ一つはっきりしているのは、ハイデッガーがこの講義において、ヘラクレイトスの「戦い」を、ナチスのイデオロギーやプロパガンダとは一線を画す仕方で、存在の真理の観点から読み解こうとしている点である。ここに、ナチズムに対するハイデッガーのかかわり方の特徴を見ることができる。

では、マルクスおよびマルクス主義についてはどうか。ハイデッガーは、トラヴニーの言うように、〈マルクス＝ユダヤ人、マルクス主義＝ユダヤ教〉という「30 年代の意識」の虜であったのか。トラヴニーがここで、ローゼンベルクの『二十世紀の神話』について注記していることから（vgl. HW, 104 Anm. 10）、この「意識」が、ナチズムの人種主義的な反ユダヤ主義を反映したものであることは明らかである。とはいえ、ハイデッガーがこのような「意識」を自身の立場として積極的に語った箇所は、管見のかぎり見当たらない。反対に、1930 年代後半に書かれた『哲学への寄与論稿』では、ボルシェヴィズムについて、「本質的にユダヤ教ともロシア精神とすら関係ない、マルクス主義の最終形態」（GA65, 54）と記されている。1930 年代末頃の「黒ノート」（「考察Ｘ」）でも、「ユダヤ人や共産主義者たち」を「敵」と捉え、自分の立場と異なる見解をその「賛同」とみなす排他的な態度が、「あらゆるドグマティズム」の特徴として批判されている（GA95, 325）。ナチズムに関する 30 年代の他の批判的な文言を見ても、ハイデッガーが、トラヴニーの言う「30 年代の意識」に対して距離を取りこそすれ、共感していたなどとはにわかには信じがたい[6]。結局、この点に関するトラヴニーの見解も、確たる根拠に基づくものとは言えない。

２．マルクス――「破壊」をめぐって

（１）マルクスの存在史的地位

以上からひとまず、トラヴニーが 1933/34 年冬学期講義のうちに読み取った、〈絶滅すべき敵＝マルクス＝ユダヤ人〉という「30 年代の意識」は、解釈図式としては、適切なものではないことが示されたかと思われる。それでは、ハイデッガーの存在史的な思索にとって、マルクスはどのような意義をもつのか。

手がかりになるのは、トラヴニーが唐突に引用していたマルクス主義に関する 1933/34 年冬学期講義での発言である。それは以下のように、段落の末尾に見られる。

> このイデア論から西洋の精神的な現存在の全体は今日まで規定されている。神の概念もイデアから発源し、自然科学もイデアに即して方向づけられている。キリスト教の思想と合理主義の思想はヘーゲルのもとで結合する。他方また、ヘーゲルは思想的で世界観的な諸々の潮流の基礎であり、とりわけマルクス主義にとっての基礎である。いかなるイデア論も存在しなければ、いかなるマルクス主義も存在しないだろう。それゆえマルクス主義に最終的にけりをつけうるのはただ、われわれがイデア論およびその二千年の長い歴史と対決する場合だけである。

（GA36/37, 151）

同様のことは、この少し前の箇所でもより詳しく論じられている（vgl. ibid., 147）。これら二つの箇所で、ハイデッガーは、プラトンのイデア論がどのように西洋哲学の歴史のなかで展開していったのかについて語っている。イデア論は、中世のキリスト教神学、近代の自然科学的な合理主義と、その所在を変えながらさまざまに受け継がれ、「西洋哲学の完成」を自認するヘーゲル哲学において合流する。そしてこれが、マルクス主義の基礎となる。つまりハイデッガーは、マルクス主義を西洋哲学の歴史的な系譜のなかに位置づけ、その際、とりわけヘーゲル哲学との関係に注目しているのである。

この点についてトラヴニーも、「プラトンの『イデア論』は『マルクス主義』の前提として示されている」（HW, 104）と触れてはいる。だが、こうした哲学史的な認識と「ユダヤ人マルクス」という「30 年代の意識」とはいかなる関係にあるのか。むしろ、ハイデッガーが、マルクス主義を人種の問題などではなく、西洋哲学の歴史的な問題であるとくり返し強調していること自体、先ほどと同じく、この「意識」に対する警戒心の表れではないのか。トラヴニーは、その可能性について検討することなく、時計の針を一気に 40 年代へと進めることで、この問題の解決を図ろうとする。トラヴニーによれば、第二次世界大戦の勃発を機にハイデッガーの「存在史的ナラティブ」は次第に現代史的な出来事を反映したものになり、それとともに、マルクスを含むユダヤ人に「『闘争的な polemisch』役割」（ibid.）があてがわれる。トラヴニーは、そうした身振りを示すものとして、1942 年頃[7]の「黒ノート」（「注釈Ⅰ」）の文章を以下のように引き合いに出す。

> 「ユダヤ性は、キリスト教的西洋、つまり形而上学の時空における破壊の原理である。形而上学の完成の転倒における――すなわち、マルクスを通じたヘーゲル形而上学の転倒における破壊的なもの。精神と文化は、『生活』の――つまり経済の、つまり組織の――つまり生物学的なものの――つまり『人民』の上部構造になる。」／「ユダヤ性」が「キリスト教的西洋」の形而上学的構造を破壊するのは、この構造がヘーゲル哲学において完成するかぎりだ。ヘーゲルの倒立を要求したマルクスは、「作為性」へと、つまり今や「第三帝国」へと直接導く諸軌道を敷設する。なぜなら、「『生活』の――つまり経済の、つまり組織の――つまり生物学的なものの――つまり『人民』の上部構造」というシークエンスが、次のことをはっきりと示しているから。すなわち、マルクス、破壊的なユダヤ人はナチズムの準備者だ、と。（ibid., 105）

トラヴニーの主張は、最後の「マルクス、破壊的なユダヤ人はナチズムの準備者だ」という一文に集約されている。ユダヤ人マルクスが、ヘーゲル哲学を転倒することで、「キリスト教的西洋」の歴史を構造的に破壊し、それがナチズムの台頭へつながった。マルクスと西洋哲学の歴史（および現代史）との関係をこのように整理するトラヴニーは、『マルティン・ハイデッガー――批判的入門』（2016 年、以下『入門』）でも、「マルクス、ユダヤ人が『破壊の原理』の主要な代表者となる」（ME, 98）と述べ、さらに論文「ハイデッガーとマルクス――幻想的弁証法」（2017 年）でも、「彼〔マルクス〕はナチ党員のイデオロギーのための根拠を準備する。そのとき、マルクスはプレ・ヒトラーであり、ヒトラーはポスト・マルクスだ」（HM, 36）と同様の見解をくり返している。はたして「黒ノート」の記述から、このような思想を導き出すことができるだろうか。

それを検証するためには、問題となった「黒ノート」の該当箇所を確認しておく必要がある。ハイデッガーはこう書いている。

> 反 - キリストはあらゆる反 - 同様、それが反対するもの――したがって「キリスト者」と同じ本質根拠に由来していなければならない。キリスト者はユダヤ性に由来する。ユダヤ性は、キリスト教的西洋、つまり形而上学の時空における破壊の原理である。形而上学の完成の転倒における――すなわち、マルクスを通じたヘーゲル形而上学の転倒における破壊的なもの。精神と文化は、「生活」の――つまり経済の、つまり組織の――つまり生物学的なものの――つまり「人民」の上部構造になる。（GA97, 20）

実はトラヴニーの引用は、冒頭の下線部をカットしたものである。このなかでハイデッガーは、「反 - キリスト」が「キリスト者」と「同じ本質根拠」をもち[8]、さらに後者は「ユダヤ性 Judenschaft」[9]に由来すると述べている。その後、トラヴニーが問題視した文言が続き、「ユダヤ人マルクス」は西洋哲学の歴史にとって「破壊の原理」とみなされた。だが、カットされた冒頭部分に注意すれば、「ユダヤ性」が「破壊の原理」であるという一見ショッキングな規定は、第一義的には、「反 - キリスト」という「キリスト教的西洋」にとってのいわば反動をもたらした、歴史的な由来に関するものであることがわかる。他方で、ハイデッガーはヘーゲル哲学を、「キリスト教的西洋」を規定する「形而上学の完成」と位置づけ、マルクスによるその「転倒」のうちに「破壊的なもの」を見ている。ここに、1933/34 年冬学期講義で指摘されたヘーゲル哲学に対するマルクス主義の関係を重ねることができるだろう。ヘーゲルによるマルクス主義の基礎づけは、マルクスによるヘーゲル哲学の「転倒」として捉え返されているのである。ただし、以前はこの歴史的な経緯が、プラトンのイデア論を軸に語られていたのに対して、ここではキリスト教が前面に出ている。いずれにせよ、マルクスによる「転倒」が、いわゆるキリスト教的プラトン主義としての形而上学の完成の転倒を意味するなら、その「破壊的なもの」とは、ひとまず、「反 - キリスト」という語で指示されている事態として理解できる。

要するに、マルクスは破壊の原理などではなく、むしろ、反 - キリストを担う転倒者として、破壊の原理に由来する歴史的な展開のいわば最終局面に位置づけられているのである。この箇所を素直に読めばこう理解せざるをえないのだが、「30 年代の意識」に引きずられたトラヴニーは、「破壊の原理」と「破壊的なもの」との歴史的な位相の違いに気づかず、いわば本末を混同し、そこに〈マルクス＝ユダヤ人、マルクス主義＝ユダヤ教〉というナチ・イデオロギーを持ち込む。その結果、マルクスによる転倒を示す引用末尾の文言は、ナチズムとの倒錯的とも言いうる親近性を表す「シークエンス」とみなされ、「マルクス、破壊的なユダヤ人はナチズムの準備者だ」という件の見解にいたった。

とはいえ、ハイデッガーにとってマルクス（およびマルクス主義）は、1933/34 年冬学期講義と同じく、ここでも西洋形而上学の歴史の問題に属する。そうである以上、この局面でなすべきは、「黒ノート」の文言を「30 年代の意識」に回収したり、いわんやマルクスとヒトラーを重ね合わせたりすることではなく、反 - キリストが「破壊的なもの」であるとは一体どういうことか、またそこにマルクスおよびユダヤ性の問題がどうかかわるのか、と問うことであろう。

（２）マルクスとニーチェ

これを考える着手点としてまず、「反 - キリスト」という語に注目したい。言うまでもなく、この語はハイデッガーがくり返し取り組んだ、ニーチェ哲学の代名詞である。ゆえに、明言されていないとはいえ、この箇所でニーチェが念頭に置かれていると見て間違いない。そう考えると、トラヴニーがマルクスとナチズムを結びつけた「シークエンス」（「生活（生）」、経済、組織、生物学的なもの、「人民（民族）」）も、ニーチェの思想に通じるものと言える。それを裏づけるように、同じ「黒ノート」（「注釈 I」）には次のような記述が見られる。

> われわれがいまだにあまり考えず、たとえ考えたとしてもたんに「歴史学的」でしかないことは、転倒におけるヘーゲル形而上学が共産主義の形而上学であること、また同じ形而上学の転倒（ヘーゲル――シェリング――ショーペンハウアー）がニーチェの形而上学を発源させていることである〔……〕。（GA97, 42）

ハイデッガーはまさしく、マルクスの共産主義とニーチェの哲学が「転倒におけるヘーゲル形而上学」のうちで共属していると見ている[10]。「ショーペンハウアー」への言及からすると、この「転倒」は、観念論的な精神と身体的な生との地位の転倒という近代哲学の一幕と見ることができる。もちろん、ハイデッガーの存在史において、ニーチェの哲学は近代哲学にとどまらず、プラトン主義の転倒というより広い歴史的な視野のもと「形而上学の完成（終わり）」に位置づけられるのだが、その発端が、同じく「形而上学の完成」と言われたヘーゲル哲学の転倒に由来しているという指摘は注目すべきものである[11]。そして、まさしくこの転倒のうちに、反 - キリストとしての「破壊的なもの das Zerstörerische」が指摘されていた。この語は「破壊 Zerstörung」に由来し、それはこの時期のハイデッガーが独特な意味で使用した存在史的な術語である。たとえば、1938/39 年の覚書『省慮』では、「大地の破壊」という事態に関して、次のように補足的に記されている。

> 破壊とはここでは、たとえば「自然」の侵害や、あるいは自然「保護」の侵害といった前景的なものを意味せず、存在の真理に対する存在者のあらゆる連関の<u>最終的な妨害</u>を意味する。（GA66, 248　ここでの「存在」は Seyn）

存在史における「破壊」とは、存在の真理との連関の「最終的な妨害 Störung」を意味し、いわゆる「環境破壊」のような物理的に被害をもたらす人為的な振舞いなどではない。この「破壊」はまた、存在の側から見れば、存在の真理が存在者から離れ去ってしまっていることでもある。ハイデッガーは、こうした「存在者が存在に立ち去られている」という事態を「存在棄却 Seinsverlassenheit」と呼び、いわゆる「存在忘却」の存在史的な本質とみなしている。そのような存在棄却と重なる「妨害」としての破壊が「最終的」と形容されることは、それが形而上学の歴史の最終局面に位置づけられていることを示唆する。そしてそのことは、上で見た「破壊的なもの」の歴史的な位置づけと一致する。だとすれば、マルクスやニーチェの反 - キリストが転倒として「破壊的」なのは、彼らの思惟において存在棄却の最終形態が「妨害」という仕方で展開されるからと言えるだろう。

ところで、トラヴニーは「破壊」についてどのように考えているのだろうか。『神話』では、「『ユ

ダヤ性』は存在者と存在との区別の秩序を『破壊する』」（HW, 105）と言われているが、この「秩序の『破壊』」が何を意味するのか、今一つ判然としない。その点、前掲の論文「ハイデッガーとマルクス」では以下のように詳しく論じられている。トラヴニーの見解がよく示されている箇所でもあるため、少し前から引用する。

> マルクスはユダヤ性の代表者であり、ユダヤ性は、「キリスト教的西洋、つまり形而上学の」歴史における「破壊の原理」だ。この概念は、ほとんどヒトラーの『わが闘争』からの引用のように聞こえる。ヒトラーにとって、「マルクス主義者」と「ユダヤ人」は同じものだ。ではハイデッガーにとって、「破壊的なもの」とは何か。明らかに歴史のなかで起こっている何かである。ここで参照すべきは、ハイデッガーが「形而上学の完成における転倒」と呼んでいるものだ。この「転倒」は、基本的にプラトン主義の「転倒」であり、それはハイデッガーにとって、ニーチェの思惟のなかでより顕著に見出されるものでもある。プラトン形而上学における物体に対するイデアの支配は、ニーチェ――そしてマルクスにおいて、イデアに対する物体の支配となる。（この意味でハイデッガーはニーチェとマルクスを「プラトン主義者」と呼ぶ。）／こうした「転倒」の破壊、あるいは破壊的な性格は、ハイデッガーにとって――とくに「黒ノート」では――存在に対する存在者の支配である。（HM, 35f.）

この直前にトラヴニーは、『神話』ではカットした「反 - キリスト」に関する「黒ノート」の文言を引用したうえで、①「反 - キリスト」が「ユダヤ性」に由来すること、②マルクスが「反 - キリスト」であるとの見解を提示している。そして引用のように、③ニーチェについても触れており、これら 3 点は本稿が重視しているものでもある。ただしトラヴニーは、引用冒頭の記述が示す通り、従来の基本路線を変えることなく、そこに「反 - キリスト」と「ニーチェ」という新たな論点を落とし込もうとする。その際に鍵となるものこそ、マルクスとニーチェによる「転倒」にほかならない。トラヴニーはそれを、プラトン主義におけるイデアと物体との関係の転倒、つまりは存在と存在者との地位の転倒と捉えている。これが「秩序の『破壊』」と呼ばれたものに相当すると思われるが、こうした「『転倒』の破壊的な性格」はまた、下線で示したように、「存在に対する存在者の支配」とも言い換えられている。

しかしながら、ハイデッガーの考える「転倒」は少し異なるようだ。問題となっている「黒ノート」と同時期の 1942 年に書かれた講義草稿[12]では、こう記されている。

> したがって、この名称〔プラトン主義〕はここでは、第一にある見解や考え方、学派学説の信奉者を意味するのではなく、存在者自身の全体が、非 - 感性的なものと感性的なものとの区分という根本特徴において示される、変わらない生起を意味している。存在者のこうした顕現可能性をまずもって受け取り、保存し、強化し、描き出す思惟は、結果から、「プラトン主義」とも言いうる。／その後将来的に、感性的なものが、非感性的なものの結果として、それどころか超感性的なものの濁りとしてすら解釈されようが、あるいは、転倒において、超感性的なものが感性的なもののさし木や上部構造として、あるいはそれどころか、たんなる仮象としてのみ考えられようが、〔さらには〕思惟が、感性的なものと非 - 感性的なものとの関係をときには表象から、ときには諸物自身から説明し、それに対応する仕方で、「主観的」ないしは「客観的」

に媒介しようが[13]、いたるところ、この根本特徴が全体としての存在者を貫通している。〔……〕／存在者をその存在者性において表象する思惟が「哲学」である。「哲学」とは、プラトン以来、感性的なものと超感性的なものとの間で、行ったり来たりするこのような理解のための名称である〔……〕。（GA78, 12f.）

この箇所でハイデッガーは、「観念論」やそれと対立するように見える「実在論」「経験論」「実証主義」さらには「唯物論」までも、すべて「根本的にはプラトン主義である」（ibid., 13）との見解を披露している。その前提となるのが、ここで語られたプラトン主義の規定、つまり、存在者の全体が「非感性的なもの」（あるいは「超感性的なもの」）と「感性的なもの」との区別を「根本特徴」として現れるというプラトン哲学の理解である（vgl. auch GA53, 18f.）。この区別は、存在者を「その存在者性において」、つまりはイデアのなかで思惟することに基づく。イデアの光を背景に、存在者は感性的なものと非感性的なものとに区別され、この両者のどちらを優位と見るのかで哲学的な立場は変わってくるが、この区別そのものは、いかなる立場であろうとも支配的なままである[14]。

こう主張するハイデッガーは、「上部構造」や「たんなる仮象」という言葉が示すように、ここでもマルクスやニーチェの「転倒」を念頭に置いている。ただし、この「転倒」は、トラヴニーが「秩序の『破壊』」と特徴づけたような存在と存在者との地位の転倒ではなく、あくまで非感性的なものと感性的なものという存在者の間での転倒である。さらにハイデッガーは、「しかし転倒は――たとえそれがニーチェのように決定的に遂行されようと――決して根 - 源に向かうことではない」（GA95, 327）[15]と言い、むしろ転倒によって、「形而上学はその本質に対して遮断される」（GA5, 217）と見ている。上で確認したことと考え合わせるなら、マルクスやニーチェの転倒のうちに破壊的なものが見られるのは、形而上学の本質をなす存在との連関がそこで「遮断され」、最終的に妨害されるためだと考えられる。他方で、ハイデッガーによれば、すでにプラトンのイデア論において、存在は存在そのものとしては問われず、存在者の存在（存在者性＝ウーシア）として理解され、それ自身「本当の存在者」とみなされている。そうである以上、トラヴニーの主張するような「存在に対する存在者の支配」は、何もマルクスやニーチェによる転倒を待つまでもなく、存在棄却はすでに形而上学の端緒を担うプラトンにおいて始まっている。要するに、トラヴニーは、存在史にとって決定的なこの洞察を見誤っているのである。とはいえ、この一見些細な誤解は、思いのほか重大な帰結をもたらす。というのも、トラヴニーは、この混乱した視座に基づいて、「黒ノート」のなかに、まるでショアを肯定するかのような「ショッキングな思想」を見出すからである。

３．ユダヤ的なもの――「自滅」をめぐって

（１）『ユダヤ的なもの』と「ユダヤ的なもの」

ここでもトラヴニーの読解を主導するのは、やはり、「マルクス、破壊的なユダヤ人はナチズムの準備者だ」というテーゼである。トラヴニーは『入門』において、これを以下のようにパラフレイズしている。

ユダヤ人の迫害へと導いた諸根拠が、ことごとく唯物論的であるなら（経済、人種そして国家）、ユダヤ人は彼らの迫害自体の責任を負わなければならない。なぜなら、そうした「破壊の原理」がマルクスによって「存在の歴史」のうちに持ち込まれたからである。／歴史学的な諸事象に

> ついてのこの解釈から、ついで、ユダヤ人の絶滅が一つの「自滅」であるとのこの上なく奇妙で、ショッキングな思想が帰結する。（ME, 98）

ここでは明らかに、「破壊」という語が「ユダヤ人の迫害」や「ユダヤ人の絶滅」といった「歴史学的な諸事象」とシームレスに接合され、あたかもハイデッガーが、ユダヤ人に対するナチスの犯罪行為について、いわば自己責任論を展開していると言わんばかりの見解が示されている。その根拠として持ち出されるのが、先ほど見た「反 - キリスト」に関する文章に続く「黒ノート」の以下の一節である。

> 形而上学的な意味で本質的に「ユダヤ的なもの」が初めてユダヤ的なものと戦うとき、自滅の頂点が歴史のなかで達成される。「ユダヤ的なもの」がいたるところで支配を完全にわがものにし、その結果、「ユダヤ的なもの」の制圧すら、それがとりわけ、「ユダヤ的なもの」へ隷属する場合には。（GA97, 20）

トラヴニーは、冒頭の「形而上学的な意味で本質的に『ユダヤ的なもの』」（以下『ユダヤ的なもの』）を、ユダヤ人マルクスによって歴史に持ち込まれた「マルクスの『破壊の原理』」と見る（ME, 98）。そして、ハイデッガーがそれを「『作為性』と端的に同一視している」（ibid.）という見解を差し挟むことで、存在史と現代史とを架橋しようとする。「作為性 Machenschaft」とは存在史的な術語であるが、陰謀や策略といった人為的な態度のことではなく、すべての存在者が「作ること」の観点から「作られたもの」（あるいは「作りうるもの」）とみなされる存在理解を意味する。トラヴニーはそこに「技術」の本質を見るとともに、「第三帝国」つまりナチス政権の存在史的な意義も汲み取っている（vgl. HW, 105）。要するにトラヴニーは、作為性を媒介にすることで、マルクスとヒトラーを結びつけ、「彼〔ハイデッガー〕は、『形而上学』におけるユダヤ的な『破壊の原理』について、それ自身が究極的にはユダヤ人たちに対して向けられているものと考えている」（HM, 37）と主張するのである。この観点からすれば、括弧なしの「ユダヤ的なもの」とは迫害されたユダヤ人、つまり「事実的なユダヤ人たちの性格」（HW, 111）を表すことになる。さらにトラヴニーによれば、ここには、存在の真理をめぐる以下のような道徳的な問題も潜んでいる。

> それ〔技術の本質〕は「作為性」として概念把握されることによって、はじめから悪い「力」として解釈される。この悪い「力」は、別の「存在の本質」――「存在の真理のための自由」――に場所を空けるために、最終的に自ら自滅しなければならない。この思想は、技術が結局はつねに悪として現出しなければならないというマニ教的なナラティブに捕らわれたままである。（ME, 147）

この見解は、ハイデッガーによって「作為性」のうちに「道徳的な価値づけ」が「いやおうなく」持ち込まれたという解釈を背景にしている（ibid., 146）。つまり、作為性という道徳的な「悪い『力』」が存在の真理を阻む「敵」（HW, 22）の本性であり、そうした「『作為性』に特別よく対応できる『人間類型』」（ME, 146）こそ、『ユダヤ的なもの』にほかならない、というわけだ。トラヴニーは、こうした〈存在の真理＝善／作為性＝悪〉と見る二元論的な思想を「存在史的マニ教」と呼び、その

帰結が「存在史的反ユダヤ主義」であると見る（vgl. HW, 22, 132）。そしてこのような道徳的で、いわば「存在救済史的」とも言いうる視点から、「『作為性』の『自滅』は、『ユダヤ的なもの』による「ユダヤ的なもの」の絶滅という形で生起する」（ibid., 111）[16]と結論づけるのである。

以上の見解に対して、まず確認しておくべきは、ハイデッガーが作為性を道徳的な観点から「自滅すべき悪」とみなしたテキスト上の根拠はどこにもない、ということである[17]。また、すでに述べたように、マルクスは「破壊の原理」ではないし、「ユダヤ的なもの」が必ずしも「事実的なユダヤ人たち」を意味するわけでもない。むしろ、直前に語られていたことを考えるなら、「ユダヤ的なもの」とは「破壊の原理」と呼ばれた「ユダヤ性」と見るのが妥当であろう。同様に、『ユダヤ的なもの』とは、形而上学の歴史のなかで、その本質が「ユダヤ性」に由来するものと言え、この条件を満たすのは、文脈上、「反 - キリスト」と「キリスト者」の二者であるが、トラヴニーはこの点も検討していない。とはいえ、『ユダヤ的なもの』による「ユダヤ的なもの」との「戦い」が、「反 - キリスト」のようなたんなる反対運動であるなら、ハイデッガーは明言していないものの、この「戦い」について、形而上学の歴史、つまりは存在史における「反ユダヤ主義」と呼ぶことはたしかに可能だろう。ただし、トラヴニーのように、そこにナチスによるユダヤ人迫害を読み込むことは、どれほど「ほのめかされている」と感じられようと、ここで語られた『ユダヤ的なもの』の内実的な意味を確定するまでは、慎重にならなければならない。

では文脈に照らした場合、こうしたいわば「反ユダヤ主義的な『ユダヤ的なもの』」と形容しうる一見矛盾した立場は、「反 - キリスト」なのか、それとも「キリスト者」なのか。後者に関して、「黒ノート」（「注釈Ⅱ」）にはたしかに、反ユダヤ主義をキリスト教による異教徒に対する弾圧になぞらえる記述がある（vgl. GA97, 159）。だがそのことが、直ちに両者の一致を意味するわけではない。では「反 - キリスト」はどうか。問題となっている箇所に続けて記された「黒ノート」の以下の記述は、こちらを支持する。

> ここから推察されうるのは、西洋の歴史の隠れた始源的な本質のうちへと向かう思索にとって、ギリシアにおける最初の始源への回想が何を意味するか、である。ギリシアは、ユダヤ教つまりはキリスト教の外部にとどまっている。（ibid., 20）

注目すべきは、下線部の「ユダヤ教つまりはキリスト教」という言い方である。ハイデッガーは明らかに、「ギリシア Griechentum」との対置において、ユダヤ教とキリスト教を一体のものと見ている。これは他の箇所でもしばしば見かける「ユダヤ - キリスト教」（あるいは「キリスト - ユダヤ教」）という言い回しを彷彿とさせるが、ここでは、キリスト者がユダヤ性に由来するという上の指摘を踏まえたものである。そして、キリスト教がユダヤ教と本質的に一体であるなら、「反 - キリスト」が反抗するキリスト者についても、厳密には「ユダヤ - キリスト者」と言わなければならない。つまり反 - キリストは、原理的に、反ユダヤ主義を内包するのである。他方で、反 - キリストにとっても、ユダヤ性は自らの「本質根拠」と言われていた。だとすれば、反ユダヤ主義へとある意味で深化した反 - キリストは、「形而上学の完成の転倒」を通じて、自身の歴史的な由来に対し戦いを挑んでいることになる。

（２）「自滅」の存在史的意義

実はトラヴニーは、『ユダヤ的なもの』を見極める際に重要となるこの一文を参照していない。その理由は、マルクスの地位や転倒、破壊といった事柄を誤解したことにより、ユダヤ - キリスト教の外部、つまり西洋形而上学の外部に位置する「最初の始源」の存在史的な意義に気づけなかったためと思われる。とはいえ、文脈に即して考えるなら、『ユダヤ的なもの』が「ユダヤ的なもの」と戦うと言われた事態は今や、第一義的には、自らの歴史的な由来に対して反抗する、反 - キリストの反ユダヤ主義的な根本動向を示すものとして浮かび上がっている。

ではこのとき、「歴史のなかで頂点に達する」と言われた「自滅」とは何を意味するのか。もちろんここでの「歴史」も、「キリスト教的西洋、つまり形而上学」（GA97, 20）の歴史であり、要するに存在史のことである。ところで、「自滅」の原語は Selbstvernichtung であり、このなかの Vernichtung は、冒頭で触れたように、「絶滅収容所 Vernichtungslager」を連想させる。トラヴニーが「黒ノート」の「自滅」をショアに結びつけるのもそのためである（vgl. HW, 111; ME, 98f., 149）。しかしながら、1938/40 年の草稿「存在の歴史」では、この語について、通常の意味とは異なるものとしてこう注記されている。

> 〔vernichten という語は〕すなわち物理的に根絶することや、あるいは戦争によって打倒することですらなく、われわれ自身がその手中に頽落している作為性へと新たにラディカルな仕方で引き込むことを通じて、固有の隠れた本質を失わせること（GA69, 119 Anm. a）

ここから、Vernichtung（vernichten）という語は、「作為性への引き込み」によって「固有の本質を失わせる」という、いわば存在史における自己疎外とでも言うべき事態を意味することがわかる（vgl. auch GA77, 21）。この箇所でハイデッガーは、独ソ戦を予感するかのように、ロシアとの関係について言及しており、この注記は、「ロシア――われわれはロシアを技術的 - 文化的に圧倒し、最終的に vernichten するのではなく、その本質へ解放する〔……〕」（ibid.）という文中の「vernichten」の語に付されたものである。ここにはロシアとの「対決」をめぐるハイデッガーの見解が示されているのだが、今は問わない。ともかく、vernichten が、物理的あるいは軍事的な意味から区別されている以上、この語を、武力による物理的（身体的）な「根絶」や敵対勢力の「打倒」を含意する「絶滅」（あるいは「殲滅」）などと理解し、またそのように訳すことは、ハイデッガーの意図を捉え損ねてしまう可能性がある。さらに言えば、問題となる Selbstvernichtung は意味上の主語を欠いているため、「『ユダヤ的なもの』および「ユダヤ的なもの」の自滅」（HW, 110）と断定するには、いささか疑問が残る。いずれにせよ、この語をショアやそれに類する出来事とみなすことは、読者をミスリードする恐れがあるだろう。（そもそも、ハイデッガーが問題となる文言を記した 1942 年の時点で、今日「ショア」と呼ばれる出来事について何かを知っていたとは考えにくい。）

注目すべきことに、「『ユダヤ教』の自滅としてのショアの彼〔ハイデッガー〕による解釈」（ME, 99）を主張してやまないトラヴニーも、「『Selbstvernichtung』はあらゆる箇所で『物理的な』絶滅として理解されているわけではない」（HW, 109）と留保をつけている[18]。それどころか、「ユダヤ人に関するハイデッガーの言及はアウシュヴィッツと結びつけられることはできない」（ibid., 13）と

注意を促してさえいる。だがその一方で、Vernichtung について「何かを無に帰することへ向けて暴力的に委ね送ること」と独自に解釈し、この語を、ショアだけでなく、「一般市民」を巻き込んだ第二次世界大戦での「甚大な『殲滅』(Vernichtung)」と重ね合わせてもいる[19]。この矛盾した態度をどう理解すればよいのか。ハイデッガーの Vernichtung や Selbstvernichtung を戦争による大量破壊やショアとみなすトラヴニーの言動は、彼なりのレトリックなのか。もしそうなら、ハイデッガーに投げかけられた、「だがいかなる仕方で、ショアをレトリックの効果として利用することは正当化されうるか」（ME, 149）という問いは、トラヴニー自身に跳ね返ることになるだろう。いずれにせよトラヴニーは、Vernichtung および Selbstvernichtung の存在史的な意義を十分に考察することなく、もっぱら語のもつ現代史的な意味に頼ることで、存在史に固有な概念を現代史の出来事に接続している[20]。そうである以上、Vernichtung を「絶滅」と同一視する彼の見解に対しては、ある程度疑ってかかる必要がある。

そのため本稿では、この語をより中立的に「虚無化」[21]と訳し、Selbstvernichtung には「自己虚無化」という語をあてることで、トラヴニーの見解から距離をとりつつ、これらの存在史的な意味の解明に取り組むことにする。ハイデッガーは虚無化について、「作為性への引き込み」によって「固有の隠れた本質を失わせること」と述べていた。ここでの「本質」という語に存在の「本質現成 Wesung」という存在史的な動性が響いているなら、この自己疎外的な事態は、「破壊」と同様、存在棄却の一形態とみなすことができる。それを裏づけるように、「黒ノート」（「注釈Ⅰ」）では、「虚無化するものは、存在との連関およびこの連関の始源を抑圧する」（GA97, 75）とあり、破壊による「妨害」は、この「抑圧」の一つの現れと解しうる。だとすれば、自己虚無化とは、「固有の隠れた本質」を自ら抑圧した、いわば「自己喪失」の状態と言え、それはまた、存在との連関を自ら拒むという意味で「自己破壊」とも換言しうる。ハイデッガーは、こうした自己喪失的で自己破壊的な自己虚無化について、当時の世界情勢と関係づけながら多様に語っている[22]。だが本稿にとって重要なのは、それらを個々に検討することではなく、自己虚無化の歴史的な「頂点」が、なぜ『ユダヤ的なもの』による「ユダヤ的なもの」との戦いに見られていたのかである。たしかに、「破壊的なもの」（反 - キリスト）が自身の由来する「破壊の原理」（ユダヤ性）と戦うことで、「固有の隠れた本質」を自ら失うのだとすれば、この戦いは、形式的には自己虚無化の一つと言えよう。だがそれがなぜ、歴史的な「頂点」なのか。

おそらくここに、ユダヤ性が「破壊の原理」と言われた理由が存していると思われる。この局面で問うべきは、ユダヤ性と存在棄却との関係である。その際、トラヴニーも注視し、ハイデッガー自身虚無化をもたらすと述べていた「作為性」が鍵になる。この語は、上述のように、存在者を他の存在者によって「作られたもの」と見る存在理解を意味する。ハイデッガーによれば、こうした理解は近代自然科学の興隆により顕著になるが、歴史的には、「すべての存在者の原因としての最上位の存在者が存在の本質を引き受けた」（GA65, 111　ここでの「存在」は Seyn）こと、つまりは、「ユダヤ - キリスト教の創造思想」（ibid., 126）を通じて形而上学的に規定されたものである。ハイデッガーは、存在者の存在が神による創造とみなされ、信仰を背景に、疑問の余地なく自明視されることを存在棄却の「最も強力」（ibid., 110）な形態と見る。1940 年頃の「黒ノート」（「考察XIII」）には、この辺りの事情が比較的まとまって記されている。

存在者の究極の存在棄却が存するのは、引き継がれ適度に調整された「形而上学」の庇護の

もと、存在者と最高存在者（エンス・エンティウム）について、〔つまり〕教会信仰の創造主と救済神について絶えず語られ、それにも拘らず、すべてが決定されずにぼやけてしまうところにおいてである。なぜなら、基づける問いは、つねにあらかじめ排除されているだろうから。（GA96, 89）

ここから帰結するのは、ギリシアの形而上学とユダヤ - キリスト教の創造思想が強固に結びつくことにより、作為性が全面的に展開するための基盤が整備され、その軌道のなかで、存在棄却が最終形態に向かうという存在史的な洞察である。ユダヤ性が「破壊の原理」と言われたのは、このような歴史的な展開の発端となった、創造神と存在棄却との根本的なかかわりを指してのことだと考えられる[23]。その最終局面が、マルクスとニーチェによる形而上学の完成の転倒であり、そこに自己虚無化の頂点が見られた。したがって、この「頂点」という語も、破壊と同じく、彼らの哲学を通じて、作為性としての存在棄却がその最終形態に達することを示していると見てよいだろう。

だとすれば、『ユダヤ的なもの』による「ユダヤ的なもの」に対する戦いは、トラヴニーが主張するような、作為性という悪の力の「自滅」や存在棄却の解消による存在の解放など意味せず、そもそも、作為性は『ユダヤ的なもの』あるいは「ユダヤ的なもの」とイコールではない。むしろ、この戦いは、形而上学の完成を転倒することで自らの本質根拠に反抗することとして、存在者の全体に対する権能を創造神から奪い取り、今後は人間という存在者が「作為性の執行者」（GA96, 111）の地位に立とうとする、いうなれば人間による神への挑戦と見るべきである。マルクスの「人民のアヘン」やニーチェの「神の死」といった言葉から、そうした反神的な態度を汲み取ることはそれほど難しくない。そして彼らの転倒は、非（超）感性的なものと感性的なものとの区別に依拠しつつ、前者を後者へ、つまりは身体的な生へと解消するが、それはまた、存在者の存在（存在者性・最高存在者）を撥無し、一切をたんなる存在者へ還元する試みでもある。

以上の経緯を存在の側から見れば、まずは創造思想において、ついで人間による創造思想の拒絶によって、存在との連関が二重（二段階）の仕方で失われた事態と言える。ここには、存在棄却のいわば自乗とでも言うべき注目に値する動向が見受けられるが[24]、「最終的な妨害」や「自己虚無化の頂点」とは、そのことと別ではないだろう。この解釈が正しいとすれば、自己虚無化を遂行するのはユダヤ教ではなく、第一義的には、神に手向かう人間、要するに近（現）代人ということになる。今や『ユダヤ的なもの』という語には、神をも恐れぬ人間の作為性に駆り立てられた姿が映し出されている。ここから振り返れば、自己虚無化の頂点を特徴づけた、「『ユダヤ的なもの』の制圧すら、それがとりわけ、『ユダヤ的なもの』へ隷属する」（GA97, 20）という転倒した事態も、存在者をさまざまに作り出し、意のままに作り変える科学技術の支配体制を示すものと見ることができる。なぜなら、作為性の覇権的な支配がグローバルに浸透しているところでのみ、たとえば今日の環境問題のように、〈人間が問題を作り出したのなら、その解決もまた人間が作り出しうる〉といった類いの人間の主体的な行動とそれに対する無条件の信頼（服従）が可能になるからである。そのとき存在者の全体、世界は、人間の作り物として現出する。存在の問いはおろか、もはや神の問いすら意味をなさないこのような状況こそ、存在棄却の最終形態と呼ぶにふさわしいだろう。

とはいえ、こうした存在史的な意味でのいわば「終末論的な」状況は、決して人間の傲慢さや怠慢、欠点などによって引き起こされるわけではない。ハイデッガーは、まさしくそこに、いわゆる「総かり立て体制」につながる、存在自身の自己拒絶的で支配的な（非）本質動向を見ている。だ

とすれば、自己虚無化の頂点を担う破壊的なものは、存在史的な思索にとって、人為的に除去できるような事柄ではない。それどころか、「破壊」は、『省慮』では、「すでになされた決断から別の始源に向けて、従来のものの最終的な妨害を遂行すること」（GA66, 21）とされ、また 1939 年頃の「黒ノート」（「考察XII」）では「隠れた始源の前触れ」（GA96, 3）とも言われるように、「別の始源への移行」という存在史的なモチーフを消極的な仕方で示しうるものとすら考えられている。

振り返れば、このような視座は、西洋形而上学の外部にとどまる最初の始源への回想に方向づけられていた。問題となった「反 - キリスト」に関する記述の直前には、以下の一文が見られる。

> われわれは、日々新たに、眼差しを、破壊できないもののうちで安らかにしておかなければならない。この安らぎから、すべての動きが発源してくる。（GA97, 20）

この「破壊できないもの das Unzerstörbare」を、ハイデッガーは「始源的なもの」と呼ぶ（GA96, 260; GA53, 68）。それゆえ、破壊の原理から自己虚無化の頂点へいたる形而上学のいわば破壊の歴史、その「すべての動き」は、破壊できないものという始源的な外部の視座からあらかじめ見られていたことになる[25]。そこにはたしかに、マルクスやニーチェの哲学を「存在史的反ユダヤ主義」と呼びうる視点も含まれている。ただしそれは、トラヴニーが主張するような、密かな人種主義の吐露でもなければ、ショアを揶揄した「事実的な歴史の悪意ある脚色」（ME, 99）の類いでもない。それは、ハイデッガーが批判し、その超克を目指す形而上学の問題に属している。

むすびにかえて

本稿では、トラヴニーが提起した「存在史的反ユダヤ主義」について、マルクスの問題を軸に検討してきた。トラヴニーの主張は、主に以下の 4 点にまとめることができる。①ハイデッガーは反ユダヤ主義的な「30 年代の意識」をナチスと共有しており、②そこでは、「破壊的な」ユダヤ人マルクスがナチズムの準備者となる。③この観点は、ナチスによるユダヤ人迫害をユダヤ教の「自滅」とみなす解釈にいたるが、④その背景には、作為性という「悪」の消滅に存在の解放を見る道徳的な評価が含まれている。これらに対して、本稿は以下の点を明らかにした。①ハイデッガーは「30 年代の意識」から終始距離をとっており、②マルクスはそもそもユダヤ人としてではなく、哲学者として形而上学の歴史に位置づけられている。したがって、③「黒ノート」の「自滅」の語に「ショア」を読み込むことはテキスト上の根拠がなく、むしろこの語は、固有の本質を自ら喪失する「自己虚無化」という存在史的な意味をもつ。そしてそこには、④道徳的な評価や作為性の消滅ではなく、逆に、作為性としての存在棄却の完成形態がみとめられる。

このようにトラヴニーの主張は少なからず問題を含んでおり、とりわけ要となる「破壊」や「絶滅」（「虚無化」）の存在史的な意義が十分に考慮されていない点は深刻である。さらに言えば、彼の議論は、問題となる文言を文脈から切り離し、もっぱら当時の言説空間に結びつけることを基本としているが、こうした読解スタイルは、解釈者の先入観がバイアスとして働く可能性が高く、哲学研究ではあまり好まれるものではない。ではなぜトラヴニーは、テキスト読解上の危険を冒してまで、「ハイデッガーの反ユダヤ主義」を強調する必要があったのか。その答えは、『入門』の「序論」にはっきりと記されている。

> ハイデッガーの思索の最大の問題は、「存在史的な」ナラティブの犠牲にすることで、「他者」を絶滅する点にある。ハイデッガーに対する批判は、それ自身において、「他者」の味方をすることである。それは、死者たち――ショアの「声なき声」（GA8, 161）に傾聴する。20 世紀の出来事が議論されるとき、彼らはわれわれの言うことを実によく聞いている。彼らは、われわれが決して知らないだろうことを知っている。彼らは、この時代の良心の根源である。われわれは、とりわけ彼らに対して、反ユダヤ主義とショアの諸事象について、道徳的な明瞭さの責めを負う、と私は考えている。（ME, 15）

ここで引用された「声なき声」とは、ハイデッガーが、1952 年夏学期講義のなかで、ソ連に抑留された戦争捕虜について語った言葉である。それをショアの声と読み替えることで、トラヴニーは自らの立場を鮮明にする。ナチスによって殺害されたユダヤ人たちは「この時代の良心の根源」であり、彼らが受けた数々の犯罪行為に対して、「われわれ」は「道徳的な明瞭さの責めを負う」と。つまり、ショアに対する道徳的な動機に促されてハイデッガーを批判している、というわけだ。そう考えると、たとえば、作為性に道徳的な評価を持ち込む一見奇妙な解釈も、切なる道徳心のなせるわざなのかもしれない。このようなトラヴニーの言動はたしかに、戦後のドイツを規定しているいわば「国是」に従ったものと思われるし、それはまた、二度の世界大戦を経て人類が獲得した普遍的な価値観に通じるところもあろう。

しかしながら、道徳的な正しさは、テキストのぞんざいな扱いを正当化できるのか。むしろ、物言わぬ他者たちに対して道義的な責任を重く受けとめるからこそ、「反ユダヤ主義とショアの諸事象」にかかわると疑われた文書を検討する際には、できるかぎり厳密で慎重な態度が求められるのではないか。本稿で検討した範囲に限定したとしても、トラヴニーの議論からそうした態度はあまり感じられない。はたして、ハイデッガーの存在史的な思索は、どのように「『他者』を絶滅する」というのか[26]。これがレトリックではないとするなら、いったい何を意味するのだろう。さらなる検証が求められる。

他方で本稿は、ハイデッガーにおけるマルクス（およびマルクス主義）の存在史的な地位が、ニーチェと近しいものであることを明らかにした。両者は、ヘーゲル哲学の転倒において共属するとともに、（トラヴニーとは異なる意味で）「存在史的反ユダヤ主義」と呼びうる立場を内包し、形而上学の歴史の最終局面に位置づけられている。とはいえ、ニーチェの哲学がヘーゲルと同様「形而上学の完成」と言われることに対して、マルクスがそのように形容されることは、管見のかぎりないように思われる。おそらくこのことは、プラトンとのかかわりをめぐって、いやそれ以上に、ユダヤ - キリスト教とのかかわりをめぐって、ハイデッガーが両者の間に何かしらの違いを見ているためだと推測できる。ただしハイデッガーは、虚無化をもたらす作為性を「『共産主義』の本質」のうちに捉え、またそこに、「一切の形而上学の完成の時代、それゆえ終わりの時代」を見てもいる（GA69, 191）。そしてこのような発言は、本稿でも少し触れた、「ロシア」や「ソ連」に関する存在史的な思索を背景にしてなされている。これらの問題系と本稿で見てきたマルクスやユダヤ的なものをめぐる論点とを突き合わせたとき、「ハイデッガーの独ソ戦」という新たなテーマが浮上してくるが、これについては今後の研究課題としたい[27]。

［凡例］

ハイデッガー全集（Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1975-）からの引用は、GA の後に巻数、頁数を示す。引用文中の強調と（　）内は原著者、下線と改行を示す／および〔　〕内の補足は筆者による。略号は以下の通り。

GA5 *Holzwege*, 1950, [8]2003
GA8 *Was heißt Denken?*, 2002
GA9 *Wegmarken*, 1967, [3]1996
GA36/37 *Sein und Wahrheit. 1. Die Grundfrage der Philosophie. 2. Vom Wesen der Wahrheit*, 2001
GA40 *Einführung in die Metaphysik*, 1983
GA53, *Hölderlins Hymne »Der Ister«*, 1984, [2]1993
GA54, *Parmenides*, 1982, [2]1992
GA65 *Beitäge zur Philosophie (Vom Ereignis)*, 1989, [2]1994
GA66 *Besinnung*, 1997
GA69 *Die Geschichte des Seyns. 1. Die Geschichte des Seyns. 2. Κοινόν. Aus der Geschichte des Seyns*, 1998, [2]2012
GA77 *Feldweg-Gespräche*, 1995, [2]2007
GA78 *Der Spruch des Anaximander*, 2010
GA95 *Überlegungen VII-XI (Schwarze Hefte 1938/39)*, 2014
GA96 *Überlegungen XII-XV (Schwarze Hefte 1939-1941)*, 2014
GA97 *Anmerkungen I-V (Schwarze Hefte 1942-1948)*, 2015

トラヴニーの著作からの引用についても上記と同様である。略号は以下の通り。

HW *Heidegger und der Mythos der jüdischen Weltverschwörung*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2014, [3]2015
ME *Martin Heidegger. Eine kritische Einführung*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2016
HM “Heidegger and Marx: A Phantasmatic Dialectic,” in *Heidegger and Jewish Thought: Difficult Others*, edited by Elad Lapidot and Micha Brumlik, London/New York: Rowman & Littlefield International, 2017, pp. 33-39

註

[1] 拙論「ハイデッガーはレイシストか――「存在史的反ユダヤ主義」を検証する（1）」『鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター紀要』第 17 号、2021 年、109-119 頁。
[2] トラヴニーによれば、マルクスの初期論文集に関するハイデッガーの草稿が存在し、そこでの主要な論点は、いわゆる「階級闘争史観」を存在史の観点から超克することにあるという（vgl. HM, 34, 37）。
[3] 本稿は、第 74 回関西ハイデガー研究会（2022 年 4 月 17 日、オンライン開催）での研究報告の原稿を加筆・修正したものである。

[4] 芝健介『ヒトラー――虚像の独裁者』岩波新書、2021 年、33 頁以下参照。

[5] 1935 年夏学期講義では、同じヘラクレイトスの断片 53 について、「ここで名指されている戦いは、すべての神的なものや人間的なものに先立って支配する抗争であり、人間的なやり方でのいかなる戦争でもない」（GA40, 66）と記されている。「戦い」が決して人間的な態度ではないと強調する点は、人間的な態度を必ずしも排除しなかった 1933/34 年冬学期講義とは異なっている。

[6] たとえば、コルベンハイヤーの生物学的世界観について、「こうした考え方はフロイトやその一派の精神分析と原則的には何ら違わない。また、精神的なものを経済的な生産過程の機能として受け取るマルクス主義とも原則的に違いはない」（GA36/37, 211）と言われていることは、このことの傍証になりうる。というのも、ハイデッガーが問題にしているのは、フロイトやマルクスがユダヤ人であることではなく、精神分析やマルクス主義が、ナチズムの生物学主義と同じく、19 世紀を席巻した「ダーウィニズムの生命論」（ibid., 210）に依拠している点にあるからである。

[7] 論拠は不明だがトラヴニーは、邦訳された論文のなかで、この記述が「1944 - 45 年」のものだと述べている（ペーター・トラヴニー、陶久明日香・安部浩訳「ハイデガーと「世界ユダヤ人組織」――「黒ノート」をめぐって」秋富克哉、安部浩、古荘真敬、森一郎編『ハイデガー読本』法政大学出版局、2014 年、320 頁参照）。

[8] ハイデッガーはこの時期、〈反 Anti〉をめぐる同様の思考形態についてしばしば言及している（vgl. GA5, 217; GA54, 77; GA97, 58, 172）。筆者はこれを「〈反〉の構造」と性格づけているが（拙論「ハイデッガーにおけるユダヤ教の地位――「反ユダヤ主義」とフィロンについて」『大谷學報』第 100 巻第 1 号、2020 年、49 頁以下参照）、本稿の議論はそれを踏まえたものである。

[9] Judenschaft という語はこの箇所にしか見られず、訳出が難しい。本稿ではひとまず、「ユダヤ教に所属していること」の意味で「ユダヤ性」としておく。なおトラヴニーによれば、この語はブーバーも使用しているとのことである（vgl. ME, 98）。

[10] 同様のことは「ヒューマニズム書簡」（1946 年）でも、「〔ヘーゲルの〕絶対形而上学は、マルクスとニーチェを通じたその転倒とともに、存在の真理の歴史に属している」（GA9, 336）と言われている。

[11] ヘーゲルとニーチェがともに「形而上学の完成」に位置づけられることに関して、1930 年代末頃の「黒ノート」（「考察Ｘ」）では次のように記されている。「ヘーゲルは近代の絶対的に主観 - 客観的なプラトン主義であり、それ自身において、キリスト教教義学を吸収している。ニーチェは一切のキリスト教的なものを締め出し、ないしは転倒するなかで、このプラトン主義の転倒である。互いに反抗し合う共属性において両者は、西洋形而上学の完成を構成している」（GA95, 310）。

[12] 「アナクシマンドロスの格言」と題されたこの講義は実施されなかった。編者のシュスラーによれば、その理由は不明だが、同時期のパルメニデス講義（1942/43 年冬学期講義）とヘラクレイトス講義（1943・44 年夏学期講義）とあわせて「いわば三部作」（GA78, 344）をなしているとのことである。

[13] この箇所には「vermittelt [wird]」と編者による補足が挿入されているが、文法上、また文意からして必要ないものと判断したため、訳出しない。

[14] またこの直後には、「唯物論の本質」に関する以下の記述が見られる。「唯物論の可能な本質は、すべては物質 Stoff であり、物質的であるという教説のうちにはなく、その〔唯物論の〕本質は、唯物論を通じて存在者そのものが『材料 Material』として、つまり、『技術』の『材料』として現出することに基づく。技術が、『形式』にとっての『質料 Material』としての存在者のかの現出と根源を同じくするかぎり、技術の本質はわれわれにはなお隠されている。」（GA78, 14）この記述は、「ヒューマニズム書簡」での唯物論に関する有名な一節と多くの点で共通している。「唯物論の本質は、すべては物質にすぎないという主張にはなく、むしろ、それに従ってすべての存在者が労働の材料として現出する形而上学的な規定のうちに存している。〔……〕唯物論の本質は、技術の本質のうちに隠れている。技術についてはたしかに多くが書かれているが、ほとんど思惟されていない。技術とはその本質において、忘却のうちに安らう存在の真理の存在史的な歴運である。」（GA9, 340）

[15] この引用は、ニーチェによるショーペンハウアー哲学の転倒についての言及箇所からのものだが、後者のプラトン主義を鑑みると、この転倒も根本的には、非（超）感性的なものと感性的なものとの転倒を含意していると考えられる。

[16] 引用文中の『ユダヤ的なもの』および「ユダヤ的なもの」の鍵括弧の表記は筆者による。以下同様。

[17] 戦後直後に書かれたと思われる「ロシアの捕虜収容所での年少者と年長者の間で交わされた夕べの対話」では、本稿 3（2）で取り組む「虚無化」が「悪」と呼ばれるが、それは道徳的な悪との区別において「悪性のもの das Bösartige」と性格づけられている（GA77, 207）。ここには「砂漠化 Verwüstung」の問題やニーチェ解釈も関係してくるが、本稿では割愛する。なおハイデッガーにおける悪の問題については、轟孝夫『ハイデガーの超 - 政治　ナチズムとの対決／存在・技術・国家への問い』明石書店、2020 年、第 4 章第 2 節を参照。

[18] Vgl. auch Peter Trawny, „Celan und Heidegger. Noch einmal“, in *Heidegger, die Juden, noch einmal*, Hgg. Peter Trawny und Andrew J. Mitchell, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2015, S. 241.

[19] ペーター・トラヴニー、阿部将伸・中川萌子訳「普遍的なものと殲滅――ハイデガーの存在史的な反ユダヤ主義」ペーター・トラヴニー、中田光雄、齋藤元紀編『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か――「黒ノート」をめぐる討議』水声社、2015 年、248-249 頁。

[20] トラヴニーは終戦直後の「黒ノート」に記された「殺人機械」という語のうちに「今や作為性が『ドイツ人』を『自滅』へと駆り立てる」という事態を読み取っている（HW, 110）。だが、「黒ノート」の当該箇所では、「本来的な敗北が存するのは、『帝国』が潰され、都市が粉砕され、人間が目立たない殺人機械によって殺戮されることにおいてではなく、ドイツ人が他者たちによって自身の本質の自滅へと駆り立てられうることにおいて、そして、『ナチズム』の恐怖政権を排除するというもっともな外見のもと、自分自身を急き立てることにおいてである」（GA97, 156）と記されており、ハイデッガーはむしろ、「殺人機械の殺戮」と「ドイツ人の自滅」とを区別している。

[21] Vernichtung を「虚無化」と訳すことは、講演「物」（1950 年）の以下の邦訳書に負っている。マルティン・ハイデガー、森一郎編訳『技術とは何だろうか　三つの講演』講談社学術文庫、2019 年、26 頁参照。

[22] Vgl. GA69, 209; GA96, 181, 260; GA97, 18, 83, 156.

[23] この点に関しては、前掲の拙論「ハイデッガーにおけるユダヤ教の地位」56 頁以下も参照。

[24] この事態は、存在史的な意味での「ニヒリズム」の極致と言えるが、その背景には、「力への意志」が「意志への意志」において自己目的的に完成すると見る、ハイデッガーのニーチェ解釈があると考えられる（vgl. GA65, 138ff.; GA94, 436; GA95, 435 usw.）。

[25] ここで触れた「外部の視座」については、拙論「ハイデッガーの信仰論――「黒ノート」に定位して」『哲學研究』第六百四號、京都哲學会編、2019 年、82 頁以下を参照。

[26] 同様の文言は『神話』でも、「アウシュヴィッツ――ユダヤ教の『自滅』か。〔ハイデッガーの〕思想は絶滅させられた者たちを、もう一度絶滅する」（HW, 111）と記されている。

[27] ハイデッガーが、『哲学への寄与論稿』のなかで〈マルクス主義＝ユダヤ教〉という「30 年代の意識」を退けたことについては触れたが、そこでは、同様の存在史的な観点から、ボルシェヴィズムのユダヤ - キリスト教的な「根源」についてもこう記されている。「ボルシェヴィズムは根源的に西洋的であり、ヨーロッパの可能性だ。つまり、大衆の登場、産業、技術、キリスト教の枯死。だが、すべてを同一視することとしての理性支配が、キリスト教の帰結にすぎないかぎり、そしてキリスト教が根本においてユダヤ教を根源とするかぎり（道徳の奴隷一揆についてのニーチェの思想を参照）、ボルシェヴィズムは実際にはユダヤ的である。しかし、だとすれば、キリスト教もまた根本においてボルシェヴィズム的である。」（GA65, 54）第二次世界大戦勃発の数年前に記されたこの一文は、ハイデッガーにとっての独ソ戦を考える際の指針となるだろう。